

児玉花外の作品に見える青年像：1914 年を例として

横打理奈（IRCP 客員研究員）

要旨：児玉花外にとって、孫文たち中国の革命家たちは英雄であった。1914 年に第一次世界大戦が勃発した結果、掲載雑誌の主要な論調であったアジア主義に影響を受け、花外の作風は「埋め草」的な位置づけになったと言われる。花外の作品を多く掲載する『太陽』『雄弁』といった雑誌は、当時の時流に沿う評論や小説が多く掲載される。そのような雑誌に掲載される作品が戦意高揚的であることは当然の結果と言える。雑誌の編集意図に沿った作品が掲載されているということは、彼に文学的作品は求められていなかったのであろう。しかしその一方で、文芸誌には小品であっても抒情的な作品が掲載されており、花外の作品がすべて「埋め草」であったわけでもなく、花外が雑誌によって作品を書き分けていたことは明らかである。

1914 年という一年に限定して、花外が作品で描く青年像から、彼の作品が雑誌に掲載された価値を考えてみたい。

キーワード：児玉花外、青年、雑誌、1914 年、時代性

問題の所在

児玉花外は、「社会主義」の語彙と結びつけられるが、それは花外が自ら社会主義詩人と称していたことに拠る¹。また詩集『社会主義詩集』が初の発禁処分にあったことも彼の名を世間に広めた。明治時代の新進詩人であったものの、『社会主義詩集』発禁後は花外を詩人とは認めないという声は同世代からもあった。大正以後の詩がそれ以前のものとは変質していることを質問されたときに自ら、「あれは詩ではない」「私の詩は明治で終わっています…」と答えたことにも起因しているが²、発禁処分後も花外は積極的に作品を発表している。生活をするためであったとも言われるが³、大正期以降も当時の社会情勢を詠む詩人の一面がある。

野澤豊「孫文に捧げられた詩」⁴、中村義「中国近代を詠んだ詩人：児玉花外と孫文・陳其美・黄興」⁵、

¹ 太田雅夫「社会主義詩人児玉花外の研究（一）～（三）」（『同志社談叢』24、2004 年／同 25、2005 年／同 26、2006 年）。野口在彌「社会主義詩人・児玉花外（6）～（9）」（『初期社会主義研究』10、1997 年／同 11、1998 年／同 12、1999 年／同 13、2000 年）。前者は、初期社会主義研究者としての立場から、花外の生涯を、家族・在籍学校との関係・その作品搜索を中心に論じており、後者の特に（8）では、作品創作の背景を追っており、特に発禁処分となった『社会主義詩集』と次の詩集『花外詩集』との関係について述べている。

² 谷村博『児玉花外その詩と人生』（1976 年、白藤書店）p228。手塚英孝による花外生前の聞き取りで、大正以後の詩がそれ以前のものとは変質していることを質問したときの回答として紹介されている。

³ 萩原茂生「花外と萩原新生」（『郷土文化 ながと』24 号（長門郷土文化研究会、2012 年））には、萩原新生が編集に携わっていた『東方公論』に、「花外に詩をのせるスペースを与え、いくばくかの稿料を渡すということ」を自分の裁量でできたのであろうとの指摘がある。

⁴ 『近きに在りて：近代中国をめぐる討論のひろば』35、1999 年。初出は『高校教育』1950 年 6 月号。

⁵ 『二松学舎大學東洋文学研究所集刊』31、2001 年 3 月。

佐藤一樹「余白のアジア主義：大正期『太陽』の詩文欄と児玉花外」⁶、後藤正人「児玉花外の孫文・中国独立革命観—「逸仙に與ふる詩」「孫逸仙今奈何」「孫逸仙を送る」を中心に—」⁷に、それぞれ花外と中国の関係についての論がある。野澤は、中国の革命とその後の政治体制・日中関係の過程から花外が雑誌『太陽』に詠んだ詩を中心に、花外のアジア主義とその孫文への心情が詠まれており、対中国の政治的な変化はあれども花外本人には一貫性があったことを説く。中村も雑誌『太陽』や「読売新聞」に掲載された詩を中心に、大正時代の花外の詠んだ中国に関係する詩を取りあげている。作品の中に表れる「自由」が、明治時代では権力支配に対決する意味としての「自由」で使われていたが、大正時代では「自由自在」「自由闊達」といった意味に変化し、その「自由」の語彙が英雄のパーソナリティに結びついた一方で、中国の革命家たちを英雄として捉えていることを指摘した。佐藤は、『太陽』に掲載されている花外の詩の内容が、「そのほとんどが前月に起こった出来事を題材としており、時事詩とでも呼ぶべき性質をもってい」⁸で、「編集政策が時代錯誤だったとあげつらうよりも、むしろ、新しいものと古くさいものとの併存を許すような総合雑誌の性格として把握しておきたい。日本を中国と重ね合わせるような古い形のアジア主義もまた、雑誌の中で一定の役割を果たし、一定の読者がいた」⁹作品であることを論じている。その中で花外の詩が、『太陽』の片隅に掲載されていた彼の詩は、中国へのアジア主義的心情の基礎となる情報が思いの外、一般の人々にも接することができたことを教えてくれるものである¹⁰と論じた。後藤正人は、児玉花外の「孫逸仙に與ふる詩」¹¹・「孫逸仙今奈何」¹²・「孫逸仙を送る」¹³の三詩から、花外の孫文観及び中国独立革命観を探っている。後藤はこの三つの作品から「花外にとって、孫文の革命は満人が支配する清国を漢人が妥当する民族革命であり、アジアはアジアが治めるべきであり、西洋の帝国主義に侵されない革命」¹⁴と捉える一方で、「当時の近代天皇制国家に対する感慨や評価も謳っていない。このことは、日本の帝国主義的な侵略の動きに目をつぶることであり、花外にとって中国革命における真の理想像が抽象的であることを示している」¹⁵と指摘しており、アジア主義の面をやはり見出している。

明治では名を馳せたものの大正時代には既に時代遅れの詩人が、『太陽』『雄弁』といった媒体に掲載されることは、それらの媒体の編集意図に沿った作品であるからだとしている。花外の詩文は雑誌の中の本流の文学作品として位置付けられてはいないことが多いばかりか、どちらかといえば、埋め草的な存在として扱われる傾向にある。そのため、これらの作品は評価対象から外れることが多い。世

⁶ 鈴木貞美編『雑誌「太陽」と国民文化の形成』2001年6月、思文閣出版。

⁷ 『月刊部落問題』292、兵庫県人権問題研究所、2001年。

⁸ 注6、p339。

⁹ 注6、p345。

¹⁰ 注6、p346。

¹¹ 『太陽』19巻3号、1913（大正2）年3月掲載。

¹² 『雄弁』6巻9号、1915（大正4）年9月掲載。

¹³ 『太陽』22巻7号、1916（大正5）年6月掲載。

¹⁴ 注7、p45。

¹⁵ 注7、p45。

界情勢を伝える報道やそれに伴う論説が掲載される雑誌の中で、時代の情勢を手頃を知ることできる詩文として読まれる性質の作品であったのであろう。花外のような作品を求める一定の読者の存在も、花外の作品が雑誌に掲載されていた一つの理由であり、花外のような作品が受け入れられる土壌があったからこそ、花外は雑誌の求めに応じてそのような作品を次々に発表していたのである、と以前拙論で論じたことがある¹⁶。

しかし、花外の作品は本当に「埋め草」でしかないのか。『太陽』や『雄弁』といった雑誌に掲載される作品に価値がないのか。そこで本稿では、1914 年という一年に限定して彼の作品に描かれた青年像を通してその時代性と、花外の作品について考えてみたい。

1 児玉花外の略歴

1874（明治 6）年 7 月 7 日に、児玉精齋と絹江の長男伝八として京都に誕生した。長男ではあったが、姉の千代（1871 年～1890 年）に家業である医業を継がせる目的で婿養子として白藤信嘉を迎えたため、1884（明治 17）年に相続の権利を失っている。同年 9 月に同志社予科・本科に学ぶが、1890（明治 23）年の新島襄の死去に伴い退学し、新島が東北伝道の目的で設立した仙台の東華学校に入学。1892（明治 25）年の廃校に伴い、札幌農学校予科に入学するが、1893（明治 26）年、義兄の白藤信嘉が児玉家から離縁したことに伴い、花外の児玉家の嗣子復縁に伴い、父精齋を見るために札幌農学校予科中退。1894（明治 27）年に東京専門学校（現、早稲田大学）に入学。ここでは、バイロン・シェリー・カーライルなどを愛読する。1898（明治 31）年、病氣療養により休学していたところ、父から帰京を命じられ、東京専門学校を退学。この頃から『東京独立雑誌』や『早稲田文学』に詩を投稿する。1899（明治 32）年に第一詩集である『風月万象』を山本露葉・山田枯柳の共著で出版し、新進詩人として認められる。1900（明治 33）年に、西川光二郎¹⁷らと『東京評論』を創刊し、西川を通して片山潜¹⁸の知遇を得て、片山の『労働世界』などにも作品を発表し一定の評価を得る。福井新聞社・やまなし新聞社を経て、『評論之評論』の記者となる。1903（明治 36）年 4 月に大阪中之島公会堂で社会主義演説会が開催され、そこで花外は「大鹽中齋先生の霊に告ぐる歌」を朗吟。好評を得る。同年 8 月末に出版予定の『社会主義詩集』（社会主義図書部 金尾文淵堂発行）が、9 月 14 日付の「内務省告示第 57 号」により発禁となる。1904（明治 37）年、『花外詩集 付同情録』を自費出版。1906（明治 39）年、「馬上哀吟」を再収録した『ゆく雲』（隆文館）を出版。1907（明治 40）年、バイロンの訳詩集『短編 バイロン集』（大学館）を出版。1908（明治 41）年 7 月、家督を継いでいた弟伝作（1877～1908）の病死に伴い、父精齋を連れて上京するも父は翌年死去。1910（明治

¹⁶ 横打理奈「世界を見つめる眼差し：W.ホイットマン・児玉花外・郭沫若」（『Eco-Philosophy』Vol.11、2017 年 3 月）

¹⁷ 西川光二郎（1876～1940）。1901 年の社会民主党創立に参加し、1906 年の日本社会党結成に参加する。片山潜らと行動を共にした社会主義者であったが、大逆事件後は転向する。光次郎の表記の場合もある。

¹⁸ 片山潜（1859～1933）。労働運動指導者。『労働世界』の主筆。1901 年の社会民主党の成立に参加。大逆事件後も労働運動を指導する。

43) 年『源為朝』(千代田書房)、1911 (明治 44) 年『東京印象記』(金尾文淵堂)・『英雄史詩日本男児』(実業之日本社)、1916 (大正 5) 『詩伝乃木大将』(金尾文淵堂)、1918 (大正 7) 年『熱血鉄火英雄伝』(実業之日本社)などを出版。これ以降も作品投稿や書籍の出版など生涯にわたり文学活動が続けるが、生活困窮が長く続き、1934 (昭和 9) 年に東京帝大附属病院物療科に入院。1936 (昭和 11) 年、救護法の適用を受けて板橋の東京市養育院に入院、1943 (昭和 18) 年 9 月 20 日、急性腸麻痺症により死去。

以上が、花外の簡単な概略である¹⁹。1920 (大正 9) 年に明治大学の学生らの要請により同大学の校歌を作詞した「白雲なびく」や、明治期に発表した作品の中で「社会主義詩」と言われる、第一詩集に収録された「鶏の歌」などが代表作とされる。その一方で、雑誌『新声』(隆文館発行)で新体詩の選者を担当し、この投稿欄から室生犀星(1889~1962)や、白鳥省吾(1890~1973)が世に出ており²⁰、これ以外にも1906 (明治 39) 年に雑誌『中学世界』(博文館)の新体詩選者となるなど、近代詩の礎を担った人物であることは間違いない。

2 花外の初期作品の特徴

花外の初期の作品で名が知られるのは、1898 (明治 31) 年 12 月『東京独立雑誌』16 号に発表、翌 1899 (明治 32) 年『風月万象』に収録された「鶏の歌」は社会主義詩として有名である。

革命をそれ鶏の／聲になぞらへ歌はん乎

眠むる天地を一聲に／のどけく高く呼びさます／力はにたり光なき／死せる此世に聲揚げて／
生命をよばふ人のごと

暗きねぐらに獨さめ／光慕ふ眼のさまは／自由の燭を手にとつて／闇世を照らす人のごと (以下省略)

キリスト教自由主義者の内村鑑三の影響を受けたとされるこの詩は、「詩の冒頭に革命の言葉があり、ついで自由、英雄、聰明、利^{とがま}鎌、義人、敵、革命軍、火炎、偽善、残虐、暴君、牢獄、民権自由、絞殺台といった文字をあえて用い、新しい社会を待望する自由民権思想の立場を明確にしている。日清戦争後のナショナリズム全盛時代に、あえて革命の言葉を用いた、わが国最初の社会主義詩人の誕生であった」が、「要するに抽象的な自由思想の絶叫であって、内部より人心に衝動を与えるものではなかった。けれども此ゆきかたは花外の永い詩作年代を通じて殆ど渝らなかったので、早くも初期

¹⁹ 太田雅夫『不遇の放浪詩人：児玉花外・明治社会主義の魁』、2007 年、文芸社) 及び『郷土文化 ながと』24 号(長門郷土文化研究会、2012 年)を参照。

²⁰ 太田雅夫『不遇の放浪詩人：児玉花外・明治社会主義の魁』、2007 年、文芸社) p150。

の作からその自己の思想を主張していたことは此一篇に於ても明らか看取される」という河合醉茗の『明治代表詩人』を引用している²¹。その河井醉茗は「花外の本領とも云ふべき悲憤激越の發想は後になるほどその濃度を増し、初期に於て必ずしも悲憤激越」²²はしていないことを指摘している。

花外の『風月万象』は、新進詩人として認められることになった重要な詩集であるが、ここにみえる「英雄」という語彙は、民衆を先導する者たらしとする気概は見られるものの、世の中をどのように変革しどのように改革しようという具体的な思想は見られない。これは『東京独立雑誌』という雑誌の性格上、キリスト教的な社会への配慮がなされているに過ぎないのだろう。ところが、『社会主義詩集』の発禁処分と家族との死別により生活の困窮が強まっていく中で、社会主義詩人から放浪詩人へと変化するとの指摘がある²³。

1904（明治 37）年『花外詩集』に収められた「馬上哀吟」は、1903 年『新小説』第 8 年 9 巻に発表された作品である²⁴。

重き 愁^{うれひ}の身をのせて／馬の歩みの遅きかな、／桔梗、小萩は咲き亂れ／露にたふるゝ女郎花、
／鶉啼くてふ野を過ぎて、／その名も高き信濃なる／浅間^{あさま}の山に來りけり。／こゝ秋風^{しやうふう}の蕭條
と／麓^{りよじん}を辿る 旅人 吹き、／松のみ多しこのあたり。

仰ぎ見すれば、空ぎはに／浅間の山の吐く煙、／鳥は迷はず、木は生^おひず、／いきたる物の影
も無く／高き^{そび}聳^{そび}えて、遠く延ぶ。／山の 威靈^{ゐれい}におのづから／首^{かうべ}くぐれば、わが袖と／馬の
鬣^{たてがみ}、灰白し／夕陽をよけて進みゆく／まごの笠にも積るかな。

壯^{さかん}なるかな 永劫^{とことは}に／天^{あめ}に炎をあぐる山、／小さき胸に火は燃えて／われも 天地^{てんち}に怨みあり、
／人の思想^{あつ}を 壓^{おさ}するな／世をば焼かむか、憤恨^{ふんこん}の／火にて 燃果^もえむかおのが身は／寧ろみ山
よ、もろ共に／裂けてくだけで冷えんかな、／呪詛^{のろひ}の世にぞ 吾^{われ}は 歸^{かへ}らじ。

この詩については、「彼のいわゆる「社会主義」を正面から高唱した作ではなく、措辞も素朴だが、その素朴で飾り気のないところが一種の魅力だったらしい」²⁵とあるが、当時、青年層には好まれた詩である²⁶。『近代詩鑑賞辞典』の「馬上哀吟」の鑑賞には、「紡績工女」「失業者の自殺」といった「直接社会問題を取り上げた作品ではないが、思想弾圧に対する憤りや敗北感を歌って」おり、「彼

²¹ 注 20、p87。

²² 河井醉茗『明治代表詩人』（1937 年、第一書房）p309。

²³ 岡野幸江「雑誌『火柱』と児玉花外」（『法政大学大学院紀要日本文学専攻研究史日本文学論叢』10、1981）。

²⁴ 「馬上哀吟」は初出と、『花外詩集』に異同があるが、ここでは詩集の方を紹介する。

²⁵ 関良一『近代文学注釈大系 近代詩』（1965 年 12 月、三版発行、有精堂）の作家・作品解説の花外の項にある。

²⁶ 島本久恵『明治詩人傳』（1967 年、筑摩書房）では「明治三十年代が終りに近づく頃になって青年たちの間に愛誦せられまたよく吟詠に合った詩の一つ」（p276）とある。

の詩に多い概念的な欠点を免れ比較的叙情性に富む点でもその代表作とするに足る」が、「彼は現実認識や思想としてよりもむしろ感情的に——社会主義に近づいたようであり、したがって感傷性や浪漫性がその信条の基になっていたと考えられる」²⁷とする。

第3連は、「叙情性の濃い部分でこの詩の主題はここに直情的に打ち出されている」とし、「熱狂的な感情は」「言うまでもなく「人の思想を圧するな」と歌われているところの、個人の思想・言論の自由を圧迫する国家権力へのそれである」²⁸とする。確かに、「不義不合理の社会をわが怒りの火をもって焼きつくしたい、あるいはそれがかなわぬならば怒りの火をもって焼きつくしたい、あるいはそれがかなわぬならばその火でわが身を焼きたい、いなむしろ火山と共に裂けてこの身を滅ぼしてしまいたい、と歌っている」²⁹とあるが、そこまで花外の気概が大きいとは考えにくい。「われも天地に怨みあり」からも分かるように憤怒の感情であるが、ここには社会への配慮や国家権力に向けたものというよりも、「小さき胸に火は燃えて」とあるように、『社会主義詩集』前後にあった社会への熱情の残り火に過ぎないようにも見えるが、むしろ個人の身に対しての感情と詠む方が素直ではないだろうか。

多くの先行研究が引用する日夏耿之介の「時代の後潮に残されて、つひにいつとなく詩壇にあつて詩壇から全く放れ去つてしまつた」³⁰という指摘が示すように、これ以降は詩人としては認められない存在となるが、これ以降の詩にも実はこれまでの作品と変わらないスタンスで詩作を行っている。

では、社会情勢が刻々と変化していく第一次世界大戦前後は、どのような時代であったのか。

第一次世界大戦は1914（大正3）年7月28日から1918（大正7）年11月11日まで続いた。ドイツ・オーストリア・トルコ・ブルガリアを中心とする同盟国と、イギリス・フランス・ロシア・セルビア・ルーマニア・バルカン諸国と三国同盟を離脱したイタリアが参戦した。アジアでは日英同盟に基づき日本が連合国側につき（1914年8月）、中国（1917年8月）が連合国側に参戦した。また、17年4月に参戦したアメリカも連合国側に参戦した。

戦場になるわけでもなかった日本は、当時の世論では参戦に賛成ばかりでもない状況であった。そこで一週間の回答期限を設けて1914（大正3）年8月15日に、膠州湾租借地を中華民国に返還するよう最後通牒を行うがドイツからの回答がなく23日に宣戦布告を行った。9月に山東半島に日本軍が上陸し、陸海でドイツ軍と戦い、11月7日に膠州湾を日本軍が占領した。この膠州湾の問題がその後、山東問題に発展し中国との関係が悪化していく原因ともなった。

第一次世界大戦が、これまでの戦争と大きく異なることは、戦場が世界規模であり、飛行機・潜水艦が導入されたことと、毒ガスなどの新しい武器が使われたことにより、未曾有の死者数と国家に対する膨大な損失が生じたこと、更にこの戦争期間中に、ロシア革命が起こり世界に初めての労働者政権が現れたことなどがあげられる。また、パリ講和会議の結果、国際連盟の発足があり、民族運動の

²⁷ 『近代詩鑑賞辞典』（1977年、東京堂）p167。

²⁸ 注27、pp167-168。

²⁹ 注27、p168。

³⁰ 日夏耿之介『改訂明治大正詩史』巻之中（1951年、創元社）。

一層の激化、オスマン帝国・ドイツ帝国などの多くの帝国が消滅し、世界地図が激変することとなった。

1914 年に限定しても、日本をめぐる状況と世界情勢は明らかに戦争参戦前後で異なる。特に中華民国に対する日本の思惑は、政治家・軍人以外に学者をも巻き込み、それぞれの立場で評論が活発化していく時代である。そのような中で、新聞や雑誌もそれぞれの立場での評論を掲載している。

3 1914 年の作品

では、花外は 1914 年どのような作品を発表しているのだろうか。

年	月	雑誌名／書名	巻	号	出版社	作品名	収録欄
1914	1	早稲田文学	第 2 期	98 号	早稲田文学社	チャボ	散文詩
	2	中学世界	17 巻	2 号	博文館	男性的悲劇平景清	
	3	学生	5 巻	3 号	富山房	太陽と青年の歌	
		早稲田文学	第 2 期	100 号	早稲田文学社	半獣	小品
		太陽	20 巻	3 号	博文館	東京市を觀望して	
		中学世界	17 巻	3 号	博文館	早春集	
	4	文章世界	9 巻	4 号	博文館	柩	
		中学世界	17 巻	5 号	博文館	鎮西八郎爲朝	
	5	新公論	29 年	5 号	新公論社	一詩一文（丸橋忠彌の歌／椅子の上）	公論文藝
	6	新公論	29 年	6 号	新公論社	赤いネクタイ（山田枯柳君へ）／巻煙草	
		中学世界	17 巻	7 号	博文館	飛行英雄重松中尉を弔ふ／紀伊は詩の國 富の國	
	7	学生	5 巻	7 号	富山房	東洋唯一 鑛山専門學校の歌	
		新公論	29 年	7 号	新公論社	紅殻の國、紺飛白の郷	
		中学世界	17 巻	10 号	博文館	秋田中學の歌	
	8	新公論	29 年	8 号	新公論社	頼三樹と土崎	
		文章世界	9 巻	8 号	博文館	北国情調	
		中学世界	17 巻	13 号	博文館	英雄熱勃發す 歐洲大戰の歌	
	9	文章世界	9 巻	10 号	博文館	青蚊帳の中	
		太陽	20 巻	11 号	博文館	都会號令の鈴音	
	10	日本英雄物語			中央書院		
		学生	5 巻	11 号	富山房	秋風日本刀の歌	
		少年		133 号	時事新報社	夕刊賣の少年（少年詩）	讀物と繪畫
		雄弁	5 巻	10 号	大日本雄弁会講談社	直江山城守の墓（史談）	

		新公論	29 年	10 号	新公論社	滑稽なる悲劇 足藝玉乗 と獨逸官憲	
		早稲田文学	第 2 期	107 号	早稲田文学社	三崎にて	
		文章世界	9 卷	11 号	博文館	小野川の半日	
		新小説	19 年	10 卷	春陽堂	戦時の浪花節	藝苑
	11	雄弁	5 卷	11 号	大日本雄弁会 講談社	高杉東行とパイロン	
		学生	5 卷	12 号	富山房	日本男子の歌	
		太陽	20 卷	13 号	博文館	戦争と強者	
	12	雄弁	5 卷	12 号	大日本雄弁会 講談社	乃木大將墓と菊花	

上記からは、『早稲田文学』『学生』『太陽』『中学世界』『文章世界』『新公論』『少年』『雄弁』『新小説』といった多くの雑誌に花外の作品が掲載されていることがわかる。この中で、青年を主題にした作品について、見ていきたい。

(1)「太陽と青年の歌」

第一次世界大戦が始まる直前の『学生』1914 年 3 月号に「太陽と青年の歌」は掲載された。

太陽は青年のものなり 青年は太陽の子なり 若き紅顔を太陽に誇らしめよ 手を
 足を 光熱に自由に伸ばさしめよ 血のめぐり 短髪の緑みづ しく男性の美は
 廿歳前後花木に優さる 薫郁や 太陽の射熱は被ふ青年の世界。

黒き帽子や長きマントや 暖かく 青春を打ちけぶらしつ 毛を燃やす 紅き太陽は
 戀よりも烈しく 青年の肉に髓に注ぎ溶け入り 君往く道は光あり 色あり 勇熱
 の 樂の音に揺るゝブツクや 躍る心。

袴の裾にも溢るゝ青春あり 再び来らず 寶玉の若き日は 若き命を護りつゝ 勉め努
 力すべし そこに美と歡喜あり 鐵を撃ついと 紅き 青年の潤ふ 澄る瞳の情熱に 曙の
 日は 耻羞よ オーロラ神も。

セントヘレナの寂寞しき孤島の拿破翁 英雄臨終の夕の冷く白き床の邊 彼が閉しゆ
 く瞳に見たるものは 海天の青に煌くうら悲しさ星ならで 歐洲蹂躪の 東西南北に 追ひ
 照したる 王冠の上に輝く 赫々の日輪なりき。

草鞋をつかむ 掌に男兒に 最も快よき 天下を獲たる 英傑の 豊太閤の一生や 強

いのち ひ はつてん も し まで さんしう や はぎ きょうじょう ひ よしまる
 き 命の火は発展し燃え / \ ぬ死ぬ迄も / 三州矢矧の橋上にうたゝねしたる日吉丸
 せんごく そら ひか けんげつ あざけ み らいこうみやう あか
 / 戦國の空に光れる鎌月を嘲りつ / 未來功名の赤き太陽を望みたり。

せいねん せいてん ご と はれ そのむね ひろ ねつ お わがひのもと たいやう くに
 青年は青天の如く晴やかに / 其胸も廣やかに熱を帯べり / 我日本は太陽の國にし
 こらい えいいうねつ なみ わ やま たか ところ に ほんだん じ ひ ごと きやうれつ そのせい
 て / 古來英雄熱の波と湧き山と高き處 / 日本男兒は日の如く強烈に / 其生を
 ねんせう はな や か にほ
 して燃焼せしめよ華やかに 匂やかに。

太陽が生命のシンボルとして描かれる中で、「太陽」と「青年」をセットにするのは、花外のモチーフの一つと言える。同年 6 月の「飛行英雄 重松中尉を弔ふ」（『中学世界』17 卷 7 号）や、1916 年の「太陽と皮膚」³¹（『文章世界』155 号（第 11 卷第 12 号））にも見られる。この神はローマ神話の曙の女神で太陽神アポロンの妹であるアウローラ（ラテン語：Aurōra）を指すが、二頭の馬にひかれた戦車に乗り、太陽神ヘリオスの先駆けとして空を駆ける女神である。この「オーロラ神」も恥じらう青年はまるで美丈夫のように描かれており、青年が輝ける存在であり、世界に輝く日本男兒は太陽そのものであると謳っている。

続く第 4 連には「拿破翁」、ナポレオン（Napoléon Bonaparte：1769～1821）はコルシカに一地方貴族の子として生まれ、フランス革命に参加。1799 年ブリュメールのクーデターで執政、1804 年皇帝となる。その後、ヨーロッパにおける一連のナポレオン戦争と呼ばれる戦争に勝利したが、対英封鎖とロシア遠征に失敗して 1814 年に退位した。1815 年皇帝に復帰、ワーテルローの戦いに敗れ、流されたセントヘレナ島で死去。フランスの近代化に貢献したとされるナポレオン法典や教育制度改革などを施行した。第 5 連の「豊太閤」豊臣秀吉（1536～1598）は尾張の生まれで、木下藤吉郎として最初は織田信長に仕えるが、織田信長の死後は全国を統一し、関白・太政大臣となり豊臣姓を賜り、その後関白を息子秀次に譲り、自ら太閤を名乗る。二度の朝鮮出兵しその途中で病死。太閤検地・刀狩りは兵農分離を促進したとして、その後の近世封建社会の礎を確立したと評価される。

この両者の共通点は、政治の中央ではない一平民が天下を取ったというものであろう。「修身」は 1890（明治 23）年に発布された教育勅語に「爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ」とあるように、忠孝友愛などが織り込まれるが、日清戦争後は歴史上の人物が扱われる傾向が増えていき、国益や近代資本主義の発展に必要な倫理としての勤勉や健康が国民に広く浸透されていく。1904（明治 37）年に国定教科書になってからは、内容も個人・社会・国家に関連することが題材となるが、そのような中で、歴史上の人物として修身教科書で扱われ

³¹ 「太陽黄色に燃ゆる下 / 花のいろ / \、人種の皮膚は異なれど / 血は熱く赤き一色なり、国は興り、国は亡ぶ」とあるように、同じ太陽の下、つまり地球の上で、人種は異なれどもそれぞれの国家における独立や革命、あるいは戦時下における反抗などに命をかけている英雄や革命志士たちを称賛している。

ていく人物に、豊臣秀吉が立身出世の典型例として登場する³²。つまり、ここで登場する二人の英雄はともに立身出世の典型例として挙げられており、旧制高校の象徴の「黒き帽子や長きマント」³³を着用すべく若い学生である「日本男児」に勉学の勧めを謳っている作品である。この作品が掲載された時期は、第一次世界大戦以前であるため、「修身」の延長のような作品である³⁴。同様の例として、先に挙げた「飛行英雄 重松中尉を弔ふ」にも「ナポレオンも豊太閤も大天才の例」と書かれている。これは、同年4月26日に青山から、所沢に帰還中に墜落死した重松翠を、ナポレオン・豊臣秀吉と同列の英雄として描いていることから、当時、求められていた英雄像であることがわかる。

(2) 「秋風日本刀の歌」

次に第一次世界大戦以後に『学生』1914年11月号に掲載された「秋風日本刀の歌」を見てみたい。

記 せよ大正三年の秋、日本人は 剣^{けん}を拔けり／強^{きやう}暴^{ぼう}の 獨逸^{ドイツ}は戦争の餘波を東方に擴げぬ／我が日の本は武の國、劍^{けん}の國／日の丸の 紅旗^{こうき}は義憤^{あきかぜ}にはためきて／秋風^{あきかぜ}は 男兒^{だんじ}に最も 壯^{さかん}なる消息^{そくし}を 齎^{もた}らし／雲は動けり溝は揺めき 軍艦^{ふね}は往く。

秋風吹いて世は騒がしく面白^{おもしろ}や／兵は多くも 木^この 葉^はと破れ散らん／獨逸^{ドイツ}の森林を 怪魔^{くわいま}の如く武を装ひ／何^なに北方の山兎鼻息強くぞろ／と／獨逸^{ドイツ}の白兎少しく肥えたるを幸ひと／歐洲を荒らすとも 何^なに 大和^{やまと}男子^{をのこ}が蹴散さん。

秋風に豆^{まめ}の 莢^{さや}を割るより素早く快よく／すら／と 齊^{ひと}しく 拔放^{ぬきはな}たるゝ日本刀／揃へば揃ふ秋の 穂薄^{ほすゞき}よりも麗はしや／歐洲大動亂に銃劍入り亂れたる 戦野^{せんや}の 中^{うち}／櫻に桔梗の紫を交へたる冴色の／威力を見せん花よりも美の日本刀。

錦繪にある英雄武將、一本差した俠客も／男の手前先には脱かず刀の鞘／脱かば血を見ん彼か我か／國交破れば地と人と悉く犠牲なり／一彈放たば最後まで晝を夜に／太陽の色變るまで、月の姿失するまで。

³² 「日本の成長と教育：教育の展開と経済の発達」（昭和37年度、編集者・監修者：文部省調査局）の「第3章：教育の目標・内容と社会・済の発展／2 わが国の教育目標・内容の史的展開／(3) 教科内容—道德教育を中心として—」http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/hpad196201_2_024.htmlを参考にした。ここには、これ以外にも歴史上の人物が紹介されており、例えば明治天皇・二宮金次郎・中江藤樹・ナイチンゲールなどが紹介されている。

³³ 『学生』5巻1号には、国進社（東京・本郷）の「最新流行コンノート型 学生用マント」の広告がある。同社の創立10周年の記念として特典がつけられている。また、同5巻2号には、アミノ商店（東京・京橋）と三越呉服店の学生用マント広告がそれぞれ掲載されている。

³⁴ ここに花外自身が知識青年として歩めなかったが故の、若者への奨励を見ることは可能であろうし、花外が好んだ青年像と英雄像についても考える余地がある。

鐵より出でゝ鐵よりも堅く鋭利に／人を斬らんと山を突かんと敵とせば／藍より澄める東方の
水に浸して鍛へたる／明晃々^{めいくわう／＼}の日本刀の 斬味^{きれあじ}よ／西方北方處を問はず垂るゝ蒼空／劍の使命
に向ひ進まん日本 男子^{だんじ}。

嗚呼秋風に世界の兵は肥えたり／残んの陽光血を染め西方しきりに稲妻す／歐洲列強が激しき
大戦争を心に描き／吾が 把^とるペンも 劍^{けん}の如くわなゝき／青インキは海の色して 昂奮^{かうふん}の耳へ
／喇叭^{らつぱ}は響けり獨逸へ獨逸へ歐洲へ大陸へ！

第 1 連は、日本がドイツに宣戦布告した膠州湾攻撃を謳っている。続く第 2 連以降はこの戦争に参加している日本人の勇壮さを日本刀に譬えている。この詩が掲載された『学生』5 卷 11 号は「膠州湾攻圍號」とあり、目次には「膠州湾攻圍記事」として特集が組まれている。「青島島瞰圖」（衆議院議員・林毅陸）・「封鎖と掃海」（陸軍参謀海軍中佐・日高謹爾）「機械水雷」（東京工科大学助教授・青木保）・「遼東還附の真相」（前外務省通商局長・中田敬義）・「過去二大戦の新事實」（海軍大將男爵・上村彦之丞）・「旅順夜襲戦の回顧」（陸軍大將男爵・中村覺）の記事があることから、この戦争の重要性を『学生』自体が把握していることがわかる。

第 6 連に「歐洲列強が激しき大戦争を心に描き／吾が把るペンも劍の如くわなゝき」と花外は書くが、そもそもこの同年同月の『雄弁』5 卷 11 号掲載の「高杉東行とバイロン」には

古來、英雄と詩人とは、人類民族の血肉とから火花のやうに生れた、双生兒みたいな者ではあるまいか。

余は今、茲に東西の二傑物の名を 提^{ひっさ}げて、この雄弁壇上にしたのは、是が活ける見地よりしたに他ならない。

高杉東行！バイロン！！何んと快よい、壯んな語呂を有つてゐるでは無いか。そして其の容貌に於ても、兩人は、世俗の威あつて猛くない頗る好男子であつた。

若き高杉は、江戸に馬關に又小倉に、劍を把りつゝ詩を作つた。少壮にて詩を發表したバイロンは後日にかの伊太利と希臘との獨立戦争に投じて劍を握つた。³⁵

と記している。花外は文人であり武人ではないが、「詩」を作る文人が己の志を持って武人へと進んでいくという作品を謳うことを得意としている。1913（大正 2）年 3 月に『太陽』19 卷 3 号に發表した「孫逸仙に與ふる詩」に「嗚呼李白杜甫の國水滸傳の國／吾は極愛す尨大夢殘るローマンチツクの郷土」と孫文について、詩の国出身の革命家という認識で作品を詠んでいる³⁶。ペンを劍や戦いの

³⁵ 『雄弁』5 卷 11 号（1914 年 11 月、大日本雄弁会講談社）、p63。

³⁶ 「孫逸仙今奈何」（『雄弁』6 卷 9 号、1915（大正 4）年 9 月）でも以下のように謳っている。

嗚呼李白杜甫、諸葛亮と項羽の國／劍俠義烈の水滸傳はローマンチツクの郷土／其の文明於ても古來三千

武器に持ち替え、内乱や革命の道に進む青年に熱い眼差しを向ける。作品に詠まれる者たちが共通して体制側ではないことも、花外が革命家を支持する要素の一つであるようだ。これは明治期に詠んでいた作品の中に登場する社会の弱者に対する眼差しと同じであると言える。しかし花外は劇的な生き方の革命家を好み作品には詠んではいるが、彼等の政治性についてはそれほど理解もなく興味もないため、彼等の政治的行動については作品には多く触れていない。ここから、花外が彼等の政治信条を正しく理解しているとは言い難く、作品も勇壮であって情緒豊かに謳っていても、彼等が何を具体的に行動しているのかは謳わない。これもまた、「社会主義詩人」と呼ばれた頃とはそう変わらないスタンスである³⁷。

また第4連の「錦繪」であるが、明治期には「教育錦繪」が啓蒙作品として文部省から発行されたものであり、その絵師を選定している先行研究がある³⁸。文部省管轄ではないが、当時の雑誌の中にも広告の形で発展することになっていくようだが、『学生』などの雑誌の表紙は、青年の心情を鼓舞するような作風に変化している。たとえば、1914年3月号では表紙は、男が種を蒔く「蒔種」であるし、同年7月号では、山の峰に登った青年が白雲を眺めている「雲表」と季節に合った表紙絵であるが、11月号では、海軍のセーラー姿の勇ましい青年が描かれている「海の精」、12月号では、銃剣を抱えて走る陸軍兵士の姿「死あるのみ」、13号では、日の丸の旗を携えた陸軍の軍人が、こちらを睨む「太陽の旗」という絵柄が採用されている。作者は挿絵画家の齋藤五百枝（1881～1966）で、後に日本映画の美術デザイナーとして有名な人物である³⁹。11月号・12月号のように、雑誌の特集や編集の方向性から表紙も、そこに収録される作品も自ずと傾向が見えるが、そうであるならば、花外の作品も雑誌の編集意図に沿った作品が掲載されることは、当然のことである。青年は「黒き帽子や長きマント」を羽織る学生であり、若さと希望の象徴から、「剣の使命に向ひ進まん日本男子」に変化した。これは花外の好みでないこともないだろうが、当時の社会情勢が第一次世界大戦へと進んで行く様子と一致している。花外の青年像の変化は出版社の編集意図であり、社会情勢と一致している。

まとめ

これまで花外は、掲載雑誌の主要な論調であったアジア主義に影響を受け、孫文たち中国の革命家

年の歴史の誇矜(ほこり)／現時支那の衰頽(すいたい)無氣力を看ては涙湧く／君は詩文を作らずも赤き革命を以て始終する／實際政治運動の生々潑刺の詩を描け／我は撃劒と縦横の喜びたる詩人李白を愛す／筆を把るも、劒を握るも、天馬空行の豪傑人物をおもふ。

³⁷ なお、同年9月の『中学世界』第17巻13号の広告で「ロート目薬と日本刀！」とあり、「いかに獨逸が醫術と兵器を誇る共我にロートあり日本刀あり」と謳っており、日本刀の切れ味は、日本男子と日本人の精神を象徴するものである、という認識を当時の雑誌の売り手も書き手も、そして読み手もが共通に持っていることがわかる。

³⁸ 井上素子「近代教育錦繪における絵師選定：《文部省發行錦繪》及び《教草》をめぐる」（『藝叢：筑波大学芸術学研究誌』27、2012年）。

³⁹ 齋藤五百枝は、『学生』の2巻1号より、表紙絵を担当している。（第1巻は1号から8号までを太田三郎がすべて担当。）数名の画家で担当しているが、第5巻では1号から13号まですべてを齋藤が担当している。

たちが花外にとって英雄であったが、アジア主義の視点を持ちこんでおり、作品としては価値を見いだせないという論であった。

確かに、花外は社会主義詩人としての主張が薄いものであったことを河井醉茗が指摘している。新しい言葉や社会の状況を巧みに利用して作品に取り込むという点では、非常に鋭い嗅覚を持っていたことは事実であり、その作風自体は大正期に入っても大きくは変わらなかったのではないだろうか。花外はこの後、実に多くの雑誌に詩が掲載されていく。前に記した『太陽』『雄弁』の他に、博文館から発行された『欧州戦争実記』（1914～1917）にも花外の作品は掲載される。また、世界大戦に飛行機が大きな戦力となることと関係するように、『飛行少年』（日本飛行研究会）⁴⁰が刊行されており、花外の作品はここにも多く掲載されている。この雑誌でも戦意高揚の評論や小説が多く掲載されるが、『太陽』『雄弁』『欧州戦争実記』などに掲載される作品と同様に、戦意高揚を訴える花外の作品が掲載されることは当然の結果と言える。詩人が書きたい作品を書くのではなく、雑誌の編集意図に沿った作品が掲載されているということは、彼には文学的作品は求められていなかったのであろう。この頃に、偉人や英雄を賞讃する作品が増えるのは、花外も元来そういう人物を好んでいたという背景もあるが、「修身」の教科書に登場する歴史上の人物と一致することに注目すると、彼の好んだ英雄は時代が好んだ英雄であり、そのような英雄に青年たちを導こうとしたのでであろう。作品も文芸作品とも言い難い勇壮なものとなり、文芸欄には置かれていないことは当然である。

しかし、花外の作品がすべて「埋め草」であったのかと言えばそうではない。文芸誌には小品であっても抒情的な作品が掲載されているということは、花外が作品を書き分けていることを証明している。『学生』といった青年誌や、総合雑誌の『太陽』では、読者青年を鼓舞するような作品が掲載されているということは、この類の雑誌が求める作品が文芸的ではなかった。そのため、文芸欄や創作欄といった箇所には掲載されなかったのである。『太陽』では、奥付の前など文学創作欄ではない場所に置かれることもあったが、そこは花外の作品が置かれる定位置であったし、『雄弁』では目次に掲載されている作品とは別に、本当の意味での「埋め草」として扱われる作品も存在するが、それは花外だけではなく室生犀星の作品もそこに掲載されていることも事実である。

明治の社会主義詩人としての花外研究は既に成果が認められるが、大正以降の作品については幾つかが紹介されているに過ぎない。社会主義詩人として評価された花外の作風が変わっていくのか、それとも変わらないのか、彼の描く青年や英雄たちは時代の変遷を経てどのようになるのか。稿を改めて論じることとしたい。

⁴⁰ 大橋博之『心の流浪 挿絵画家・樺島勝一』には、「少年向けの雑誌の表紙は抒情的な画よりも、戦意高揚のための勇ましい画が求められるようになった」ため、「当時としては最先端の軍事兵器である飛行機を啓蒙するための少年向け雑誌『飛行少年』が大正4年1月に創刊されることになった。勝一はその『飛行少年』を発行する日本飛行研究会に入社。表紙や口絵、挿絵一切の筆をまかされたのだ」とある。